

調査報告

山田孝雄文庫蔵「印孝・永澤等賦山何百韻」

日時 平成21年9月13日(金)

場所 富山市立図書館(富山市丸の内一丁目四ノ五十)

調査者 伊藤伸江(代表者)・奥田勲(分担者)

〔書誌及び内容〕

卷子本一軸。表紙は紺色藤花文様の布表紙。外題なし。端裏に「寛政五年六月五日心敬筆と打申候」と記述されている。この文字は表装時を示すものか。首題「賦山何連歌」。一紙は縦十八、二cm、横五十七、八cmの楮紙であり、八紙が継がれている。八紙は、表装された際に裏打ちされたと考えられ、その時期は幕末であろうか。書写年代は室町中期以降と考えられる。

文庫目録における題名は「印孝・永澤等賦山何百韻」と付けられているが、内容は、河越千句の第四百韻であり、目録にもそれが注記されている。目録番号は No.5452(W911.2-I-6842)。

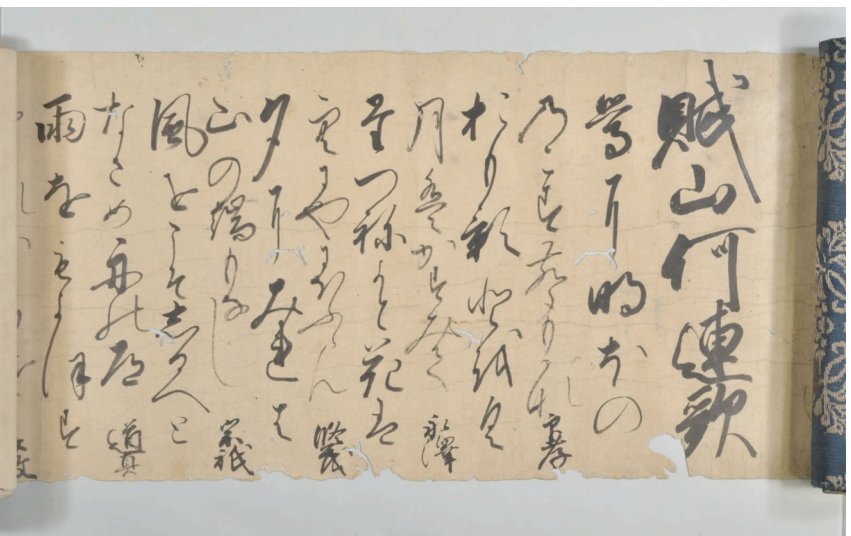
河越千句は、文明二年(一四七〇)一月十日から十二日にかけて、関東に下向した心敬を宗匠とし、扇谷上杉氏の重臣である太田道真が、居城川越城に於いて、宗祇ら連歌師と在地の武士、僧らを集め興行した千句である。連衆には心敬に加え、宗祇、印孝と有力な連歌師がおり、また興俊(後の兼載)が参加している点も注目される。第一百韻の発句は心敬であり、ついで第二百韻の発句が宗祇、第十百韻の発句を主催者道真が詠んでいる。主たる連衆のうち、この百韻の発句の作者印孝は、都から関東に下つてきた法華宗本国寺の僧であり、後に『新撰菟玖波集』に九句入集した。太田道真は、『新撰菟玖波集』に二句入集、修茂は大胡氏、河越千句では第七百韻の発句を詠み、『新撰菟玖波集』に五句入集。長敏は心敬の関東下向の世話をした鈴木長敏であり、義藤は上杉氏の被官、義弘は、山田孝雄文庫本『宗祇時代連歌』におさめられた文明五年(一四七三)雪月(十二月)五日の何路百韻では、「幾弘」と記されていることから明らかのように、直前の義藤に引かれた誤写で、栗原幾弘である。永澤は、続群書類従本、古典文庫内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本、天理図書館本の川越千句では「永祥」であるが、当百韻は太宰府天満宮西高辻家蔵本、小鳥居家蔵本、書陵部蔵本等と同様「永沢」である。また、**長刹**は写本では「条」に「りつとう」と見える。刹の異体字で、山下**長刹**か。

句上にあげられた各連衆の句数は、印孝(七)、永澤(八)、修茂(八)、宗祇(十三)、道真(十

一、長敏(十一)、心敬(十五)、義藤(五)、義弘(五)、興俊(一)、満助(二)、中雅(七)、長剎(二)である。ただ、句上の句数は九十九句と誤っており、実際は長敏(十)、義藤(六)、長剎(三)である。

この百韻における心敬の作句を見ると、あえて具体的な事物、名所などをちりばめた句を詠むことで、抽象的になっていく句運びをさえぎり、後の句をつけやすくしたり、季を変えて、それまでの句境を一新したりと、宗匠として百韻の運びに細やかな配慮を見せていることがわかる。また、関東下向の世話をした鈴木長敏の句に付けることも多く、太田道真への配慮も忘れていない。例えば、道真の句「はるとあきとを旅にをくりつ」には「白河やしらぬ関路をけふは見て」と付け、文明二年春に川越を訪れ、秋には会津から白河の関へと旅する心敬自身の予定をそのままに句にしたてて親しい語らいの句としている。

なお、河越千句の第四百韻は、他に単独で伝わるものとして天理図書館所蔵『連歌懐紙巻子本集』(れ・四・一・二)内に「印孝等・賦山何連歌百韻」(伝寿慶写)が存している。



〔翻刻〕

- 1 鶯に明ほののこす声もかな 印孝
- 2 おも影とをく月はかすみて 永澤
- 3 たつねよと花は空にやにほふらん 修茂
- 4 夕にみれは山の端もなし 宗祇
- 5 風をこそしるへとなさめ舟の道 道真
- 6 雨をもよほす雲なおこりそ 長敏
- 7 あさな／＼気色かはれる秋深て 心敬
- 8 や／＼さむき日のけふことのかげ 義藤
- 9 かれ／＼の草のいほりの一重垣 義弘
- 10 はつ雪ふれは人もかよはず 興俊
- 11 さらぬたにゆふへさひしき山本に 満助
- 12 あらしのそこに猿のなくこゑ 中雅
- 13 西川やのこる入江の松古て 宗祇
- 14 こゝろに遠きこともみえけり 印孝
- 15 夢いかてしらぬかたにも通ふらむ 義藤
- 16 き／＼しはかりに物おもふころ 義弘
- 17 うちつけにわか身をしほる秋の風 道真
- 18 草葉にやとれ袖のうは露 長敏
- 19 宮城野や花にみたるゝ虫鳴て 心敬
- 20 月にを鹿のこゑいそく暮 宗祇
- 21 住侘てなくさめかたき山里に 永澤
- 22 雲ゐる峯のまつもうらめし 印孝
- 23 色かはる心を袖のはつ時雨 道真
- 24 うつろふ人にはるゝ名もかな 心敬
- 25 とはれぬを恨て花やしほるらん 義弘
- 26 風よりさきの宿のむめかゝ 宗祇
- 27 春の夜のまくらしつけくめは覚て 義藤
- 28 空にわかるゝあかつきの雲 印孝
- 29 ちきらねと波に岩しく清見潟 心敬
- 30 すゝしさたのむ露もなつかし 永澤
- 31 つゐのみちいのれる草の原にきて 長敏
- 32 さしもとふへき人そさきたつ 中雅

- 33 面影のむかふはかりの槓の戸に
修茂
- 34 くれて待とる山のはの月
心敬
- 35 秋風に夜舟こたふる梶の音
義弘
- 36 たへて聞にも浪はすさまし
満助
- 37 うらふるゝ身を海士の子になしはてゝ
宗祇
- 38 いつかはやすく世をもすくさむ
印孝
- 39 つかふるは心の外の老もうし
道真
- 40 朝夕すむやあらましの山
中雅
- 41 すゑいそく園に小松を植をきて
心敬
- 42 野中の家は風もたまらす
修茂
- 43 くる人もまとをの衣さむき日に
長敏
- 44 はるとあきとを旅にをくりつ
道真
- 45 白河やしらぬ関路をけふは見て
心敬
- 46 こゝろのおくの山そかなしき
永澤
- 47 数ならて身をかくれ家はかひもなし
宗祇
- 48 草引すつるふるさとの庭
印孝
- 49 月たにもやとらぬ池の水あせて
義弘
- 50 夕かせまよふいはれ野ゝ秋
長敏
- 51 露わけは恋する袖に成やせむ
宗祇
- 52 とひこすとてもせめてわするな
義藤
- 53 世にあらむ程はとばかり思ふ中
道真
- 54 いのちはしるや花よ紅葉よ
中雅
- 55 すみ馴て身さへふりぬる木のもとに
長敏
- 56 こゝろとめぬる山もはつかし
心敬
- 57 うかりしにこりすも月の秋まちて
修茂
- 58 浦のとま屋のかすむ暮かた
印孝
- 59 釣舟のかくるゝ奥の天津鴈
道真
- 60 いかにしたひて春をのこさむ
永澤
- 61 空にきえ野へにとけゆく去年の雪
心敬
- 62 わかしろ髪そありしまゝなる
長剌
- 63 うき旅を都にしはしなくさめて
宗祇
- 64 なるゝころもを秋はかへけり
義弘
- 65 鳶の葉に苔もむもるゝ嶺の松
心敬

66 露しもかゝり軒そかたふく
 67 うちも寝ぬ夜半の蓆に月落て
 68 はや鳥なきぬ明かたの空
 69 人をなとことわりもなくとゝむらん
 70 我たにいとふわか身成けり
 71 しられしの山を涙の尋ねきて
 72 世にやふりたるみちは残らむ
 73 氷らめや雪に笈の水の音
 74 火をたく庵そ冬を忘るゝ
 75 かり寝する木の下紅葉おりしきて
 76 しつけき風に樵おつる声
 77 秋の日のうなかみ山や暮ぬらん
 78 みしかくなりぬ夏そひくすゑ
 79 おとろふる賤か衣のすそ朽て
 80 いほりをみれば身をもかくさす
 81 とふ時やあはしとするを忘るらむ
 82 うけぬを祈る恋のはかなさ
 83 まことしる道には心かけもせて
 84 にし日になるをいとふ狩人
 85 冬かれの嵯峨野をとをみ帰るさに
 86 あらしの風のをくる山もと
 87 暮そ憂秋もやちかく成ぬらん
 88 こゝろほそしな花おつる比
 89 身のはてを思ふ栖は長閑にて
 90 かけもよはれるななき日の空
 91 涙なとかけぬ契にくもるらん
 92 まつ夜なからの明かたの色
 93 きぬ／＼を人につくらむ鐘もうし
 94 あすもやとはぬ暮をうらみむ
 95 あちきなくつらき命の消もせて
 96 なす事もなくすめる山かけ
 97 大方にたのむはかりの墨の袖
 98 こゝろをわれにつけよ法の師

長刹
 中雅
 道真
 宗祇
 心敬
 義弘
 心敬
 義藤
 道真
 修茂
 宗祇
 永澤
 宗祇
 永澤
 長敏
 心敬
 義弘
 義敏
 永澤
 修茂
 宗祇
 長敏
 心敬
 義弘
 中雅

99 水はやき岸に筏のさほとりて

宗祇

100 柚木くたしつ殿つくりせり

道真

印孝七 義藤五

永澤八 義弘九

修茂八 興俊一

宗祇十三 満助二

道真十一 中雅七

長敏十一 長利二

心敬十五